

risei + trip

vol.
08



特集

僕はメディカル
アスリート。

特集

僕はメデイカル アスリート。



履正社には、医療国家免許の取得を目指しながら、好きなスポーツを高いレベルで続ける学生が数多く在籍している。医療とスポーツの文武両道を歩むことで得られるものは何だろうかと。体育会系医療人の知られざる魅力を探りに、ある先輩を訪ねた。



photographs by Naohiro Kurashina



(写真右)土居整形外科で働く履正社の卒業生たち。全員が「メデイカルアスリート専攻」出身(左上)鈴木さんの施術の様子(左下)鈴木さんの上司である細川裕二先生も、野球経験者

鈴木航平さんは、2年前に履正社医療スポーツ専門学校柔道整復学科を卒業した24歳。大阪と京都のほぼ中間に位置し、ベッドタウンとして知られる大阪府高槻市で、地域医療を担う「土居整形外科」の医療スタッフを務めている。

同院は診察の他にスポーツの特殊な領域のリハビリテーションも行っていて、鈴木さんの主な仕事は、患者さんに対するリハビリの施術である。

「将来は自分の整骨院を持ちたい」という、社会人2年生の鈴木さんの一日は長い。

「朝は8時前に出勤して、まず先輩方との勉強会院長を交えた全体の勉強会があります。そして9時から13時半くらいまでが午前の診療で、16時半から20時半頃まで午後の診療です。そこから、その日の患者さんのレントゲンを先輩の指導の下で診させていただいて、21時過ぎに帰るとというのが日常です」

今は診療所の近くのマンションで一人暮らし。帰宅すれば、夕食もそこに翌日の勉強会の準備だ。

「膝の解剖学的機能」「腰椎椎間板ヘルニアの統計データ」などの文献を読み、レポートにまとめる。

「まだ知らないことばかりなので、毎日一つ一つ、患者さんにとってプラスになることを学んでいます」

野球をして単位がもらえる。

休日高校の野球部のトレーナーとしても経験を積んでいる鈴木さんは、元野球少年で、ポジションは捕手。岡山県の強豪高校では夏の県大会へスト4まで進んだ。一旦は関東の大学に推薦で入学するも、将来を考えて履正社への再進学を決意した。「小学校の頃から整骨院によく通っていて、柔道整復師は身近でした。高校の同級生が履正社に入学したので、専門学校が存在は知っていました」

入学後は、スポーツ学科で野球の特技や理論を学びながら、柔道整復師の国家免許を目指す「メデイカルアスリート専攻」を選択した。

「野球の練習をして単位をもらえるのが新鮮でしたし、学校が大阪の社会人野球リーグに所属しているので、後のプロ野球選手たちと対戦できたのも良い経験でした。今振り返れば、野球をしながら医療を学んだからこそ、アスリートの心と身体両面がわかるのだと思います。一流選手のレベルを肌で感じるには、試合をするしかありませんから」

履正社の卒業生の特徴とは。

鈴木さんの上司で、この道15年目の細川裕二先生も、インタビュに加わってくれた。

「『体育会系医療人』の強みは、医療と現場の双方の視点から選手に寄り添って、色んな選択肢を提示してあげられることだと思います。例えば高三の夏にケガをした球児が『無理をしてもやりたい』と言っている時、科学的データを示して『ここで休んでもちゃんと間に合う』と説明することもありますが、様々なリスクを示した上で、それでも行きたいという選手を背中を押してあげることもあります」

細川先生の下で働くりハビリ科の医療スタッフは10人。そのうち履正社の卒業生は7人もいます。

同院の採用にもかわる細川先生が言う。

「履正社の学生は他校の卒業生と比べ、ウチに入職してくる時点で将来のビジョンが設計されている印象です。目的をもってちゃんと整形外科に来ているなど、やはり先生方の生徒に対する愛情、成長を見守る姿勢といえますか。そういうものがすぐ見られる学校です」

卒業後も、厳しくも暖かい先輩方に見守られている鈴木さん。「自分の院を持つ」という夢に向かって、成長の日々は続いている。

その他のページをご覧になりたい方は、
本校広報部までお問い合わせ下さい。

 0120-8404-21 (通話無料)